様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４３３０１６６

研究課題名（和文）戦跡の歴史社会学―地域の記憶とツーリズムの相互作用をめぐる比較メディア史的研究

研究課題名（英文）Historical Sociology of the Place of War Memory

研究代表者
福間　良明（FUKUMA, Yoshiaki）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：７０３８０１４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦跡をが戦後日本でいかなる戦争観を創出し、また、いかに社会的に受容されたのかを検証した。戦跡は「記憶」を伝える主要なメディアでありながら、a.戦跡を通じて、地域のいかなる記憶が紡がれたのか、b.地域の記憶はツーリズムと結びつきながら、観光者・来訪者にどう受容され、そこにはいかなる「断絶」「継承」があったのか、c.そこから、戦跡がどう（再）整備され、来訪者や現地の人々の「記憶」を創出・改変したのか、については明らかにされていない。本研究は、これらについて調査・分析を行い、その成果、は著『「知覧」の誕生』（柏書房・2015年6月刊行）等にまとめている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to analyze the historical process of constructing the place of war memory. In postwar Japan, various places of war memory were “invented”. We focused on these process and analyzed the social background of them from the view point of media history and historical sociology. The main result of our study is our coauthor book The Birth of “Chiran” (published on June, 2015).

研究分野：歴史社会学

キーワード：戦跡　メディア　記憶

１．研究開始当初の背景

「戦争の記憶」研究は近年、著しい進展を見せている。聞き取りや証言をもとに、記憶に内在的に分け入ろうとするもののほか、戦後思想や大衆文化における戦争観を考察する議論も少なくない。申請者自身も、『「反戦」のメディア史』（2006 年）、『焦土の記憶』（2011 年）等の中で、戦後思想や映画・出版・雑誌等における「戦争体験の断絶」とその社会背景について考察してきた。

しかし、知識人言説や活字・映像メディア以上に、人々の戦争観の形成に深く関わってきたのは、戦跡（遺構・資料館・モニュメント）ではないだろうか。広島・長崎・沖縄への修学旅行は広く行われてきたし、一般観光客が遺構や資料館を訪れることも多い。戦跡は、戦争体験記や戦争映画にとりたてて関心がない人々にも、広く戦争体験を伝えるメディアであり続けてきた。だが、これらがいかに生み出され、どのように人々の戦争観の形成に関わったのか。そこでは、いかなる戦争体験の「継承」「断絶」が生じたのか。それについては、さほど検証されていない。

戦跡については、文化人類学・地理学・宗教社会学等では、少なからず議論がなされており、とくに記念碑や慰霊を手がかりに、その地域における「記憶」を考察する研究には一定の蓄積がある（北村毅『死者たちの戦後誌』御茶ノ水書房・2009 年、上杉和央「沖縄戦の『慰霊空間の中心』整備をめぐる地域の動向」『洛北史学』11 号、2009 年など）。しかし、戦跡はその地域で受容されるばかりではなく、ツーリズムとも結びつき、観光の対象とされることも多い。のみならず、観光振興が意図される中で、記念碑や遺構、資料館が整備・改修されることも少なくない。だとしたら、地域の「記憶」はいかに観光者・来訪者に提示され、そこでいかなる「継承」や「断絶」が生じていたのか。さらに、そうした力学は個々の戦跡地によって差異をはらんでいる。広島、長崎、沖縄、グアム等では、それぞれに戦跡観光の成立状況は異なるのではないか。

本研究は、これらの問題意識を起点に構想されたものである。

２．研究の目的

本研究は、戦跡の「メディア＝媒介」としての機能に着目しながら、以下の点を明らかにすることをめざした。

・戦跡（遺構・記念碑・資料館）を通じて、地域のいかなる記憶が紡ぎ出されたのか。
・観光者・来訪者はそれをいかに受容したのか。
・そのことが、戦跡の（再）整備や戦跡観光のあり方にどう作用したのか。
・以上のことが、旧「大日本帝国」の範囲において、いかに相違していたのか。

これらを通じ、記憶の創出と受容のプロセスを比較し、「記憶の継承」のポリティクスについて考察を行なった。

３．研究の方法

戦跡の構築プロセスに関するメディア資料、公文書、地元新聞資料を現地で収集したほか、関係者へのインタビューも行った。

これらの資料をもとに、戦跡（とくに、旧陸軍基地・知覧など）の戦跡の構築過程の戦後史をメディア史・歴史社会学の観点で、分析を行なった。

４．研究成果

これらの視角のもと、知覧・特攻戦跡のほか、沖縄・広島などについても調査と分析を行ったが、以下に主な研究成果である「知覧の戦後史」についてまとめておく。

（１）知覧と固有性の喪失

知覧・木佐貫原の飛行場跡は、戦後の初期から「特攻戦跡の街」の様相を呈していたわけではない。陸軍航空基地へと「動員」されたこの地は、戦後すぐに茶畑へと「復員」した。戦後一〇年にして特攻観音堂が建立されたが、それが地域アイデンティティの核であったとは到底言い難く、その慰霊祭も、この地に移設された護国神社の祭日に合わせて行われていたに過ぎなかった。「特攻」は当初から「知覧の体験」などと目されていたわけではない。戦後知覧と戦後日本の変容が絡まりながら、「特攻」は地域の記憶として発見され、その「戦跡」が発明された。

以上に見てきたような「知覧の記憶」の構築過程には、固有性の喪失とでも言うべき状況が透けて見える。

かつてであれば、人々は護国神社の慰霊祭にて、地域の戦没者に向き合っていた。知覧という小さな町の戦没者たちは、それなりに「顔が見える」存在であっただろう。その意味で、死者たちはいくばくかの固有性を有していた。そこでは、「特攻」は彼らに付随するものでしかなかった。この地の参道の名称が、「特攻観音参道」ではなく「護国神社参道」であったことも、それを物語っていた。

もっとも、護国神社において知覧の戦没者全般が「顕彰」されることは、一面では個々の戦没者の固有性を削ぐものでもあっただろう。中国戦線から、ニューギニア、レイテ、硫黄島、沖縄に至るまで、多様な戦争体験を経た知覧戦没者が一括りに顕彰される状況は、個々の体験や思念を掘り下げる営みとは異質なものである。ただ、そうだとしても、それは、少なくとも後年に比べるならば、地域戦没者の存在や体験が想起されていた状況を、ほのかに浮かび上がらせているようにも思える。じっさいに、一九六〇年代までであれば、町報で戦争体験記や遺骨収集の手記が掲載されたこともしばしばあった。そこでは、知覧の戦没者やその固有の経験が思い起こされていた。

しかし、一九七〇年代以降、地域戦没者の記憶は後景化し、「特攻（出撃）」の記憶のみが

前景化した。それは、知覧住民が当事者として体験したものではなく、あくまで知覧の外部にある陸軍航空兵たちの経験であった。知覧住民はせいぜい彼らを目撃し、彼らに感情移入した体験を有していたに過ぎなかった。

（２）戦友会の記憶の内面化

換言すれば、知覧は「戦友会（元特攻隊員）の記憶」を内面化するようになったとも言える。一九六〇年代後半以降、戦友会の活動が全国的に活性化したが、そのことは彼らが知覧を慰霊観光の対象として見出すことを促した。特攻観音堂慰霊祭の参加者数は増加し、それは護国神社慰霊祭よりもはるかに前景化するようになった。そのなかで、旧隊員や遺族と旧住民とが旧交を温めることもあったわけだが、これらを通して、知覧では、旧隊員や遺族たちの「特攻」の記憶を自分たちのものとして内面化するようになった。特攻銅像や遺品館が建てられ、全国から多くの遺品が集まるようになったことも、それを加速した。折しも過疎化に悩まされていた時期であった。それだけに「特攻」は観光資源として見出されるに至り、それはますます、自分たちの記憶として受容されていった。

とはいえ、旧特攻隊員たちのぎりぎりの心情がどこまで共有され得たのかと言うと、それはやや限定的だったのかもしれない。『町報ちらん』では、特攻観音慰霊祭にかつて第六航空軍司令官であった菅原道大ほか、軍上層部の出席がたびたび報じられていた 。だが、こうした慰霊祭の場であれば、軍や上層部の暴力に関する議論が避けられることは、想像に難くない。

周知のように、特攻出撃においては、「自発的な志願」が暗に強制されがちであった。また、エンジン・トラブル等により基地に帰還した特攻隊員は、罵倒殴打されたあげく、機体修理後すぐに、しかも単機で再出撃させられることも少なくなかった。二五〇キロや五〇〇キロの爆弾を搭載している特攻機は機動性に劣るため、特攻出撃においては、敵機攻撃に備えて、敵艦船近くまで掩護機が援護することが通例であった。特攻機単機での出撃は、戦術的な効果は何ら期待されず、ただ死を強要するものでしかなかった。高木俊朗も、報道班員当時と戦後の聞き取りを綜合しながら、『知覧』『陸軍特別攻撃隊』のなかで、これらの暴力を詳述している。

しかし、特攻観音慰霊祭などの場でこれらにふれることは、おそらくきわめて難しいものであった。吉田裕の指摘にもあるように、戦友会は少なからず、「加害証言などを抑制し、会員を統制する機能」を有していた。かつての「戦友たち」が親睦を重ねることは、その延長で、「戦友会の構成員が戦場の悲惨な現実や、残虐行為、上官に対する批判などについて、語り、書くことを、統制し、管理」することにつながった。往時の上官と兵士たちの親睦の場は、証言や記憶を引き出すというより、その吐露にブレーキをかけるものでもあったのである 。

当然ながら、戦友会への参加を拒む者も少なくなかった。ある元兵士は、中隊戦友会の案内に対し、「あの戦時の中隊内は一生わすれない暴力の集団です。ですから中隊の会合又は刊行物等には不参加させていただきますので、今後一切便りをくれないで下さい」と綴っていたという 。古参兵から、執拗で理不尽な肉体的・精神的暴力にさらされ続けたまま、敗戦を迎えた初年兵は、戦友会へ参加する気になどなれなかったのである。

「遺族への配慮」もまた、証言を抑制する機能を帯びていた。元兵士たちのあいだでは、遺族に対して、「凄惨で醜悪な戦場の現実」を伝えるべきではないという意識が共有されがちだった。それだけに、「遺族への配慮」は「客観的には、証言を封じるための『殺し文句』となってい」たのである 。

旧軍上層部と元特攻隊員、そして遺族が集う特攻観音の慰霊祭は、まさにこのような場であった。だとすれば、特攻出撃を強いた上官たちの責任や暴力は、そこでは触れがたい話題であった。知覧で継承され、内面化されたのも、まさにこうしたなかで紡がれた戦友会や遺族の「特攻の記憶」であった。『町報ちらん』における特攻観音慰霊祭の記事では、上官と末端の隊員との軋轢に対する言及は特段見られないが、それは行政広報紙の特性もさることながら、戦友会の証言抑制を経た記憶が知覧で「継承」されたことに起因するものでもあった。

（３）ナショナルな知覧像の逆輸入

こうした動きは、ナショナルなメディアにおける知覧イメージを受け入れることとも重なっていた。高木俊朗「知覧」（一九六四‐六五年）が『週刊朝日』に連載され、また、それが単行本化され大ヒットしたことは、全国的に無名の地であった知覧が広く知られることにつながっただけではなく、そこでの知覧イメージが知覧において逆輸入されることを促した。こうした動きの萌芽は、すでに一九六二年のＮＨＫドラマ『遺族』（高木俊朗原作、山田洋次脚本）の放映の際にも見られたことは、既述のとおりである。

むろん、旧軍の組織病理を批判的に論じた高木の「特攻」認識と戦友会の場で紡がれるそれとは、異質であった。だが、高木の意図とは別に、『知覧』はしばしば特攻隊員の純真さを美しく描いた物語として、受け止められるむきもあった。それは、かつての陸軍飛行兵でも例外ではなかった。全国少飛会（陸軍少年飛行兵の戦友会）の初代会長・清水秀治は、その設立集会の場で高木の『知覧』に言及しながら、以下のように語っている。

> 私はついこの間『知覧』という小説を読みました。特攻隊で出撃した吾々の仲間達のことを見ました。某将校は特攻出撃を拒み、遂には飛行場で自爆したとのことでありましたが、それに引きかえ少年飛行兵は

純真で大切な飛行機と共に、お国のために役立つことを誇りとして笑って離陸していったと言うことが書かれてありました。この気持こそ我々少年飛行兵の気持だったと思います。

高木の意図を超えて、『知覧』が「お国のために役立つことを誇りとして笑って離陸していった」少年飛行兵の物語として受容されていることがうかがえる。当事者である元飛行兵にしてこうであれば、知覧住民が同様の理解をしたとしても不思議ではない。

（４）知覧とメディアの往還

メディアや戦友会の期待を内面化しながら紡がれる知覧の自己像は、必ずしも知覧に留まるのではなく、それが逆に、メディアや戦友会へと還流される動きも見られた。

少飛会（陸軍少年飛行兵出身者の戦友会）の機関誌『翔飛』では、「盛大だった知覧特攻観音祭」（創刊号、一九六八年）といった見出しのもと、毎年のように慰霊祭参加者の感想・報告文が掲載され、知覧と元隊員との親和性が語られていた。元陸軍少年飛行兵の作家・神坂次郎は、特攻隊員の手記や証言を集めた『今日われ生きてあり』（新潮社、一九八五年）を著したが、それは一九八二年に三七年ぶりに知覧を訪れたことが契機になっていた。一九七七年には、かつて「岸壁の母」を歌いヒットさせた菊地章子が、鳥濱トメをモデルにした「基地の母」をテイチクレコードから発売した（第三章参照）。

これらの動きも、少なからず知覧で紹介された。一九七七年四月一日、知覧町体育館と特攻遺品館の二会場で、菊地章子による『“基地の母”演奏会」が開かれ、『町報ちらん』（一九七七年五月二〇日）でも、その様子が大きく扱われた。『町報ちらん』（一九八五年九月一日）には、神坂次郎が『今日われ生きてあり』を刊行したことに加え、その印税で石灯籠が寄進されたことが報じられていた 。

メディアの期待を内面化しながら紡がれる知覧の自己像を、戦友（会）やメディアが取り上げ、それを再び知覧が積極的に受容していく。こうした往還を通して、「特攻の町」というローカル・アイデンティティは、ますます強固なものとなった。

（５）戦時の忘却

かくして、知覧の公的言説においては、地域に固有の戦争体験は後景に退き、元飛行兵たち（戦友会）の記憶、ひいてはナショナルな知覧イメージが、再生産されることとなった。

もっとも、知覧基地から出撃した陸軍特攻隊員の議論に特化していれば、知覧との関わりは、わずかながらも伺えたのかもしれない。だが、遺品館には海軍機・零戦の残骸が展示され、町報では元海軍特攻隊員の慰霊祭参加も大きく報じられるなど、知覧の枠を超えて、「特攻」全般が語られるようになっていった。「特攻」が声高に語られるほど、知覧の体験の固有性から遊離していく状況を、知覧の戦後史に見ることができよう。

知覧における固有性の喪失は、戦争に熱をあげた往時の経験を見えにくくさせることにもつながったのかもしれない。『知覧町報』（一九三八年一二月三〇日）には、知覧高等女学校生による以下の文章が掲載されていた。

「漢口陥落」

おゝ！、何といふ快い響きを持つ言葉でせう。私達はどれ程この公報を待つて居た事か、　忘れもしません。去る十月二十七日午後五時半、陸軍省から、こう発表された時、私達は思はず万歳を叫びました。兵隊様、本当に有難うございました。［中略］私達も早速翌日盛大な旗行列をいたしました。花火のさく裂、打ち振る旗の波、そしてその波から沸き起る勇ましい軍歌、歓声、小さい私共の町はこの日ばかりは日の丸で埋められたかの様でした。

漢口陥落のニュースをめぐる知覧町の高揚感が、生き生きと感じられる文章である。のちに特攻隊員の出撃に涙し、戦後はその回想録を編纂する知覧高等女学校の生徒たちは、日中戦争下の帝国陸軍の進撃に歓喜する少女たちでもあった。

むろん、戦争遂行への高揚感は知覧に限るものではなく、広く国内で見られたものである。だが、それも含めたさまざまな体験のなかで、知覧では「特攻」への感情移入の記憶が選び取られた。今日、旧飛行場跡地の特攻平和会館に多くの観光者が訪れているのも、言うなればそれに端を発する。だが、それは、知覧住民に固有の体験から遊離することを意味する。そこに浮かび上がるのは、「継承」の過程で何かが削ぎ落されてきたさまではなかろうか。

知覧の固有性を欠いた「特攻」が声高に語られるほど、知覧住民に固有の戦争体験が問われなくなる。こうした記憶の力学は、知覧のみならず、さまざまな戦跡地域の「記憶」に通じる事柄なのかもしれない。むしろ、「外部」の特攻隊員の体験が地域のシンボルと化した知覧は、固有性の欠如と戦争語りの量産が並走しがちな「戦争の記憶」の戦後史を、凝縮された形で指し示しているのではないだろうか。

戦後、七〇年が経過しようとしている。今後も「継承」の切迫感は恐らく多く語られようが、果たして「忘却」を思い起こす営みは、どれほど見られるだろうか。継承されようとしているものは、多くの場合、幾多の忘却を経た残滓でしかない。はたして、継承すべきは、その残滓なのか、それとも忘却されてきたものなのか。旧飛行場跡地の戦後史は、今日のわれわれにこうした問いを投げかけている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）
①福間良明「遺構の発明と固有性の喪失」『思想』2015 年 8 月号、1-23 頁
②福間良明「戦跡の『発明』と地域の記憶」『図書』784 号、2014 年、2-7 頁、査読無
③権学俊「日韓両国における朝鮮人特攻隊員に対する意識変容と追悼・忘却」『日本語文学』
第 67 号、2014 年、495-522 頁、査読有
④山本昭宏「第五福竜丸事件からビキニ事件へ：ビキニ事件の受容からみる日本人の核意識の変容」『年報日本現代史』19 号、2014 年、153-184 頁、査読無
⑤山口誠「『ここ』を観光する快楽：メディア時代のグローカルなロケーション」『観光学評論』観光学術学会、1 巻 2 号、2013 年、173-184 頁、査読有

〔学会発表〕（計　2　件）
①福間良明「特攻の町・知覧」の発明と固有性の喪失～飛行場跡と護国神社の相克～」愛知県立大学公開講座、2014 年 12 月 13 日、愛知県立大学（愛知県長久手市）
② YAMAGUCHI, Makoto, From War God to Firefly: Remembering Kamikaze (Tokko) in Postwar Japan, The Eighteenth Asian Studies Conference Japan, 2014 年 6 月 21 日,上智大学（東京都千代田区）

〔図書〕（計　3　件）
①福間良明・山口誠編『「知覧」の誕生―特攻の記憶はいかに創られてきたのか』柏書房、2015 年 6 月、全 430 頁
　※研究分担者等の担当は以下の通り
プロローグ――戦跡の編成とメディアの力学（福間良明）
第一章　特攻戦跡の発明――知覧航空基地跡と護国神社の相克（福間良明）
第二章　〈平和の象徴〉になった特攻――一九八〇年代の知覧町における観光と平和（山本昭宏）
第三章　「特攻の母」の発見――鳥濱トメをめぐる「真正性」の構築（高井昌吏）
第四章　「知覧」の真正性――「ホタル」化する特攻と「わかりやすい戦跡」（山口誠）
第５章　万世特攻基地の戦後――観光化の峻拒と慰霊への固執（白戸健一郎）
第６章　海軍鹿屋航空基地の遺産――特攻をめぐる寡黙さの所以（松永智子）
第７章　朝鮮人特攻隊員のイメージの変容――韓国における「特攻」の受け入れがたさ（権学俊）
第８章　「戦闘機」への執着――ミリタリー・ファンの成立と戦記雑誌の変容（佐藤彰宣　※研究協力者）
第９章　コンビニエンスなマンガ体験としての「知覧」――『実録神風』のメディア力学（吉村和真）
第 10 章　記憶の継承から遺志の継承へ――知覧巡礼の活入れ効果に着目して（井上義和）
エピローグ――戦跡が「ある」ということ（山口誠）

②福間良明『「聖戦」の残像』人文書院、2015 年 6 月、全 430 頁

③山本昭宏『核と日本人：ヒロシマ・ゴジラ・フクシマ』中央公論新社、2014 年、全 266 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
福間　良明（FUKUMA Yoshiaki）
立命館大学・産業社会学部・教授
　研究者番号：70380144
(2)研究分担者
山口　誠（YAMAGUCHI Makoto）
　関西大学・社会学部・教授
　研究者番号：80351493
井上　義和（INOUE Yoshikazu）
　帝京大学・総合教育センター・准教授
　研究者番号：10324592
山本　昭宏（YAMAMOTO Akihiro）
　神戸市外国語大学・外国語学部・講師
　研究者番号：70644996
白戸　健一郎（SHIRATO Kenichiro）
　東京大学・総合文化研究科・研究員
　研究者番号：80737015
権　学俊（KWON Hakjun）
　立命館大学・産業社会学部・准教授
　研究者番号：20381650
高井　昌吏（TAKAI Masashi）
　桃山学院大学・社会学部・准教授
　研究者番号：20425101
吉村　和真（Yoshimura Kazuma）
　京都精華大学・マンガ学部・教授
　研究者番号：00368044
松永　智子（MATSUNAGA Tomoko）
　東京経済大学・コミュニケーション学部・講師
　研究者番号：60735801